

[発行日]=2000年5月30日

[本文]

アフリカの太鼓、ジャンベを作り始めたのは去年の秋で、土で作った本体はとっくに出来ていたが、太鼓の皮を手に入れる機会が、なかなかやって来なかった。

「スウェーデンにいて、アフリカン・ドラムでもないでしょう」という苦言のメールが長崎から届いたこともあり、ジャンベはお預けの格好で、その後、ラップランドの先住民、サーメの太鼓についてあれこれ調べるために時間を費やした。

サーメ太鼓は作りかけたのだが、焼く前に土に戻してしまった。彼らが太鼓に込めた意味の深さに、たじろいだ結果である。

二月にラップランドで太鼓に張るためのトナカイの皮を手に入れた後、ジャンベ作りを再開し、鉄のリング作りにかかった。毎週火曜の夜、鉄加工の教室がある。十回コースで三百クローネほど払って参加するのだが、私はほんの一、二時間で済むはずだからと、もぐりで入れてもらった。

針金を切って丸くするだけのことは、たいして時間もかからなかったが、溶接のためのガスがないというので、その日は友人たちの作業の手伝いをした。コークスの炎で真っ赤に溶けた鉄を、大きなハンマーでたたいて延ばすのが私の役目だった。

彼女たちが作っているのは、指輪のような小さな物から、植木鉢を載せる台のような大きな物までいろいろで、ドアの取っ手、燭台（しょくだい）などの生活用品もあれば、体に巻きつけるアートジュエリーや、中に電球が入っている、白い毛糸で作った大きな繭のような物を、くねくねと包み込むランプアートのような物まである。

針金のリングが仕上がった後、テキスタイル（染織）の教室に行き、リングに巻く布を分けてもらった。ヤンナが作った、茜色（あかねいろ）に染めた木綿の美しい布が入った。

次は紐（ひも）だが、街で五、六軒の店を回ったが、自然素材で、ころ合いの太さの物は見つからなかった。テキスタイルのオアサが、旗ざおの紐を作る工場に働いているというので尋ねたら、車のトランクにちょうど良い太さの紐を持っていて、譲ってもらった。テキスタイルの工房で色染めしたら、ポリエステルに木綿が交じった素材で、マリンプルーになるはずのものが、薄紫になってしまった。

さて、すべてそろったところで、皮を水に一晩浸して柔らかくして、次の日、張ってみた。陶磁器のカラフルな釉薬（ゆうやく）と、茜色の布、薄紫や緑の紐との組み合わせで、なかなかの出来栄えだった。

次の週、ロルフの家でジャンベ・パーティーがあった。十ほどのジャンベと、サーメの太鼓やスコットランドの太鼓などが集まってきた。

私のジャンベは大きさもさることながら、音も重いベース音で、ひときわ目立っていたが、なにせ手の動きがつかない。

アメリカインディアンやサーメの歌、踊りなどと共に、五時間以上も太鼓をたたき続け、翌日、腕が上がらなかった。

その後ときおり、授業の合間に外に出て、打ち鳴らしている。